東海大學日本語文學系紀要
多元文化交流 vol.3 2011年6月

＜特集：特別寄稿＞

台湾紀行ーN先生への手紙

ひろたまさき

拝復

お手紙ありがとう御座いました。いろいろと御教示いただき感謝します。

五月のベトナム旅行に続いて七月に台湾に行ってきました。ベトナムも台湾も初めてですが、ずっと前から訪ねたいと思っていたところです。しかし、両国ともに、日本の戦争責任、植民地支配の責任の問題があり、その歴史をちゃんと勉強して準備する必要があるので、それが十分でなくて、なかなか動けなかった次第です。このたび、ベトナムは大学で教えている友人の誘いで日本語教育の手伝いをしながらハノイだけに2週間滞在、台湾は新竹の交通大学で教えている友人が誘ってくれたので、それを好機として2週間で全島一周、準備不十分のままに出かけたわけです。台湾は先日帰ってきたところですので、先生の御教示もありました台湾旅行を中心に、御報告したいと思います。

１、

第一日は、台北駅の近くのホテルに泊まり、二日目は、一人で台北の街を歩きました。故宮博物館や国父記念館にも行きましたが、まず第一に総統府(前の総督府)を訪ねました。そこの係員がボランティアの日本語ガイドを紹介してくれましたが、総督府ですからどうしても植民地時代の歴史の話をすることになります。年表や写真の展示もあるのです。ガイドは60歳くらいの男の人でしたが、日本人の若い女性たちと私を合わせて5人を相手に、立派な日本語で流暢に説明してくれました。

しかしその説明は、台湾に街を作り鉄道を作り、とてもいいことをしてくれたなど、日本のよい話ばかりされるので、私がたまらなくなって、そんなによいことばかり話すのは如何なものか、せめて良い面と悪い面を語るべきでないか（植民地支配に良い面のあろうはずがありませんが）、そうしないと日本人にとってもよくないことになるのでないかと、異議申し立てをしましたら、話を急に霧社事件に移し、「原住民が日本人を百人あまり殺して、・・・」と語り始めました。それ以前に原住民がいかに奴隷的な扱いを受けていたかの問題を抜きにしての語りで、唖然としてしまいました。

あとで、台湾の友人で旅行業者のAさんにその話をすると、「日本が鉄道を作ったのは、台湾から木材やサトウや樟脳や花崗岩を日本に運び出すためで、そのために台湾の自然が破壊されたり、その苦役で台湾人がどれほど苦しめられたかという事実があるし、強制労働、従軍慰安婦の問題、言論弾圧や政治からの排除などもあるけれども、そんな話をすると観光ガイドの仕事はやっていけない。すぐクビです。日本人観光客は年寄りが多くて、昔の台湾を懐かしんで来ているのだから」と、憤懣やるかたない面持ちで語りました。まさに「アカシアの大

連」と同じです。東海大学の先生にもその話をしましたところ、そのガイドさんは、本心からそう思っているのかもしれないし、あるいは、遠くから折角尋ねてきた日本人に日本の悪口を言って気分を悪くさせるのは客人をもてなす礼儀ではないと思っているのかもしれない、ということでした。

＊「アカシアの大連」というのは、芥川賞受賞作品『アカシヤの大連』の影響で大連のイメージが戦後日本に社会的につくられたことを指しています。大連はロシア人が造った街で、ロシアからアカシアを持ってきて街路樹にしたのですが、その後日本が支配することになり、そこに住んでいた日本人や旅行者が、戦後、大連を訪ずれるときに、アカシアの並木道の風景を懐かしむようになったという話です。それは、流行歌にもなって、日本人の郷愁を誘う外地の典型的な風景にさえなったのですが、アカシアの樹が老化して植え替えざるを得なくなった時に、それらアカシアの樹は中国にあるアカシアの種類とは異なるのでニセアカシアだと言って中国人は他の樹にしようとしたところ、日本人がアカシアを変えないでくれと要請し、中国側も日本人観光客を呼ぶためにアカシアの大連のイメージを再生しようとしたと言うのです。大連市はそのためにこの十数年アカシア祭まで催しているとのことです。それは日本人の中国植民地化の風景であったはずなのに、それを懐かしむということは中国人にとって耐えられないことであるはずなのに、観光という商売のために、日本人に妥協したことを物語るエピソードではないでしょうか。（高媛「ポストコロニアルな「再会」――戦後における日本人の「満州」観光」岩波講座『アジア・太平洋戦争』2006年。）

そういうことと関係があるのでしょうか、台湾の多くの人はとても親切です。私が見当つけてバスに乗ったのですが、途中で目的の台北駅とは違う方向に転じたので、あわてて運賃を支払おうと紙幣を出すと運転手はダメだといいます。戸惑っていると、60歳くらいの小柄な女性がやってきて、しっかりした日本語で「貨幣でないとダメですよ」と忠告してくれて、私の手のひらの小銭から選んでくれて、「どこへ行くのですか、台北駅なら私も同じだから、一緒に降りましょう」と、とても親切に道案内をしてくれたのでした。すべてがこのようで、ベトナムと同じく親切な人が多いという感じを強くしました。それで、Aさんにこの話をして、「台湾の人は日本人だけでなく誰にでも親切なのだろうね」というと、「いや、大陸から来る中国人に対しては、嫌悪感を持っている人が多い。ことに南部では」といいます(このときAさんは、「自分も中国人なのに、自分を中国人というべきか台湾人というべきか、迷っています」と付け加えましたが、私は何もいうことができませんでした)。ベトナムにも中国人に対する反発のようなものがあったことを思い出します。中国人に対する不人気は、国境紛争など政治的な対立の歴史や経済的な利害と関係するでしょうが、また近年多くなった中国人観光団体に対する反感もあるようです。行列をちゃんと守らず、彼らの立ち去ったバスの車内にはゴミが散乱しているなどとても行儀が悪く、日本の観光団体は礼儀正しく清潔好きだという評判があるようです。それは、日本でも海外旅行が大衆化し始めた70年代には、農協団体のヨーロッパ旅行での行儀の悪さが評判になって国辱ものだと非難されたことがあり、海外旅行などの異文化接触になれない段階では、どの国の人でも観光旅行が大衆化すると、そういう異国での公共の場の作法を身につけるための訓練の時間が必要なのだと思われます。といって、現在の日本人が

外国にあってほんとに礼儀正しいかどうか、集団行動についてはいまだ心配するところです。それに、アジア地域に対する優越感のようなものが未だにあることが気になりますし、中国人の場合も最近の経済成長による国際社会への自信が優越感を生み出している趣もあります。しかし、台湾の場合は、解放後(戦後)の蒋介石ら国府軍による苛酷な支配が今でも強烈な記憶として残っていて「中国人」嫌いになったということが考えられ、それが日本の植民地支配のときの記憶を薄めているようにも思えるのです。どこの都市に行っても、国民政府の暴虐な支配に抗議して1947年に起こった全島的な蜂起である2・28事件の記念館や記念公園が作られている事は驚きです。日本の植民地支配を批判的に記憶にとどめておこうとする記念碑のようなものは、歴史博物館にはもちろん記録されていますが、一般的には、そういう記念碑のようなものは、霧社事件のもの以外は、あまり見られなかったことを、私はかえって奇異に思ったことでした。

ベトナムでも、日本軍が占領した数年間は、歴史博物館に記録されていましたが、屋外で抵抗あるいは解放の記念碑のようなものは見ませんでした。そこで日本軍によって数十万の人が殺された（200万人だと言う人もいましたが、これは聞き間違いか誤りでないかと思っています・・・後記；200万人が餓死させられたというのは、その後の日本人による歴史研究でも確かめられていて、今では公式の歴史事実になっています。日本軍がベトナム人から米を取り上げて200万人の餓死者を出したということです）という記憶も強烈なこととして残っているはずですが、アメリカとの悲惨な戦争の記憶はすべての記憶を上回るほどに酷かったというべきでしょう。おそらく、過去の記憶はこのように、何重にも重なって、複雑に絡み合っていて、思い出されるときの状況によって、思い出され方がことなってくるのでしょうし、「記憶」の操作で一方的なフレームアップがなされることもしばしば経験するところです。ここに歴史を振り返る、研究するむつかしさがあるように思います。それだけに又、過去の記憶に捉われている研究者自身の反省の仕方が重要なのだと自戒せざるをえません。

国父記念館の巨大さにはかないませんが、総督府の建物はとても立派で、今でもがっしりとしています。近代化の進展がはげしくて日本に負けないくらいすばらしい超モダンの高層ビルが建ち並んでいる台北ですが、総統府はそれらに遜色を見ないくらいのもので、おそらく当時の日本の優秀な技術者達が、夢を持ってその能力を思う存分に発揮しようとしたもののひとつでありましょうが・・・。そういう意味では「満州」や朝鮮におけるのと同じであったと思われますが、植民地支配にはこのように優秀な能力が動員されただけでなく、そのことに生きがいをみた沢山の才能があったのではないかと思ったことでした。Aさんはこの建物のデザインが、大元帥陛下の軍服姿そっくりであると言います。そう言われればそう見ることもでき、そこに植民地支配の記憶があるということでしょう。

２、

霧社には、コーネル大学教授の酒井直樹さん63歳(日米共同研究で一緒にやった友人です。哲学者で90年代から「日本人とはなにか」の問題提起で日本の論壇に衝撃を与え続けていて、最近では『希望と憲法』(以文社)という名著があります。その彼が台湾に来ないかと誘ってくれたのです)と、以文社の社長の勝俣光政さん70歳(かつて『展望』の編集長をやっていた人です)と75歳の私の老人三人組で、台中にある東海大学（日本の東海大学とは関係ありま

せん）の先生2人に案内されて、訪れました。霧社は、台湾のヘソに当るところで、大陸側と太
平洋側を横断して結ぶ交通の要衝にあり、峨々たる山また山のこんなに奥深いところになぜ警察や軍隊など多くの日本人が居たのかということが分かりました。このあたりは木材や樟脳の産地としても重要だったのです。山地民を囲い込んでそのための労働に従事させていたのです。
東海大学の人たちは月に一度霧社事件の研究会をやっていて、その中で聞き取り作業も続
けているそうで、その日も三人の聞き取りを私たちと一緒にやるつもりだとのことでした。それ
ぞれ1時間から2時間にかけて聞き取りをしたのですが、その方法が、語る人に任せて、できるだけ聞き手のほうからは口を出さないやり方だというので、興味を持って見せてもらいました。
そうした方法は「他からの力で反省が加わり記憶を修正してしまう恐れ」をできるだけ排除するといういい面もありますが、記憶の構造を考えると、こちらから刺激を与えることによって、思
い起こしたり、自分の思い込みや誤りに気付いたり、語り手自身の反省による埋もれた記憶の掘り起こしということが重要だと思うのですが、それはどうするのかということが気になりまし
た。
　実際、私たちが聞いた一番の語り手は、92歳のKさん（台湾人ですが、植民地時代に改名したときの日本名をそのまま使っています）でしたが、話しなれた日本語で、流れるように語りま
す。これまでにも聞き取りを何度も受けてきたという感じで、そこで一貫して語られることは日
本人がいかに親切だったかということでした。彼女は日本人に家内の使用人として家族ごと雇われていたのですが、事件当時は小学高学年くらいの年齢で、そのこともあってか事件そのものについては全く触れませんでした。ただ日本人の「所長」さんがいかに両親や親族を親切に扱ってくれたか、面倒見がよかったかという話が本筋でした。私はできるだけ口をはさまないよ
うにしていたのですが、「日本人はよく人を殴ったということですが・・」と誘い水をかけると、「そ
ういえば、あの兵隊さんは酷かったな。あの人は私に言い寄ってきて、・・・」と、その兵隊との関
係に話は進んでいきました。ともかく、当時の日本人で台湾の人たちに誠実で、尊敬される人格者が居たのだという事はよく分かりました。権力的な権威、文明優越の権威、それに人格的な権威が備われば、それは圧倒的な重みでその人をとらえたことでしょう。おそらくそういう日
本人は台湾全体に、あるいは朝鮮や満州にも、たくさん居たのだというべきでしょう。どこの

植
民地にあっても、暴力だけで支配が維持できるわけでなく、文明の優越性だけでも不十分なのではないかと思ったりします。
日本にあっても、戦争であのように酷い目に合わされた相手であるアメリカ人を、私たち？は人格的にも優れた存在だと見る羽目？におちいったのではなかったでしょうか。原爆というきわめて残酷な武器を使用した相手を！！。私は中学・高校時代にキリスト教に魅せられてクリスチャンは皆人格者だと、欧米映画に熱中して欧米人は皆自立的合理的なのだと、あこがれたことがありましたが、私の接したハノイ国家大学の学生や東海大学の学生は、ともに日本語学科の学生ということもあってか、日本文化やアメリカ文化に魅せられていて、そういうあこが
れの中の一人に私も見られているのかもしれないと思ったことでした。酒井直樹さんが「東アジ
アの人々は合衆国を進歩の先端をゆく近代社会として仰ぎ見るように馴らされてきたのであり、自らを「遅れた社会」と看做すように仕組まれてきた」（「パックス・アメリカーナの終わり」神
奈川大学評論2010年）と指摘しているように、日本人をも同じような偏見で「仰ぎ見ている」の
ではないかということです。つまり、文明の優越性が人格的権威を作るということも大きいでし
ょうから、なかなかむつかしい問題のように思います。もっとも、彼女達は、かつての私たちのよ
うに100％西洋崇拝といった幻想は持っていないでしょうが・・・。
　Kさんが事件のことはまったく触れないことと、村の他の人たちについての話もしないことが、
私の気になることでしたが、後で東海大学の人に聞いてみると、村には他にも90歳前後の語り手が居るけれども、その人たちは植民地時代の彼女のことについては一切語らないし、彼女も村の人たちの昔については語らないということでした。東海大学の聞き取りで、聞き手の介入をできるだけ避ける方法をとる必然性が分かったように思えます。おそらくKさんは、どっぷ
り日本人に可愛いがられ、日本人から恩恵を受けている人間として、村人から白眼視されていたのではないか、それが今「平和共存の方法」として互いに語らない領域を作っているのでないか・・・。しかしその領域を破らないことには事件の真実も、村人同志の真の交流も、まして原
住民との交流も、もてないのではないかといわざるをえません。しかし、そのようにして外部の
ものがおせっかいをしたために酷い状況が生まれるかもしれないのですから、聞き手たる研究者はよほど腰をすえてかからねばならないことで、私たちのような通り過ぎていく人間のやれることではありません、Kさんは、私たちがどのような人間かを詮索しようとはしませんでし

た。
彼女は私たちを見るというよりは、日本語が分かる、これなら安心して話せるという世界で、記
憶をそのままに提示しているという感じがしてなりませんでした。そのかぎりで彼女は幸福感に包まれている。92歳のその彼女にいまさら混乱を持ち込むことでなにができるか、考え込むことになります。しかし、そこには語り手と聞き手との対話がないのです。対話する過程で、変
な方向に「修正」が生じるおそれもあるが(多くの研究者が自分の図式に有利な証言をえようとして誘導する)、逆に自分の語りを反省して、自分の記憶の一面性や独善性を発見することが出来るかもしれないし、研究者の方もこれまでの思い込みを反省する羽目になるかもしれません。そこに「聞き取り」という作業が両者に、大げさに言えば自己変革を呼び起こすことになるのではないか、両者の理解しあえる場が生じ、「記憶」をもっと多様な面から見つめなおすこ
とになりうるのではないでしょうか。「聞き取り」が話し手からの記憶の一方的な収奪にならない
ためには、やはり対話が不可欠のように思います。しかし、いまさら？92歳の彼女に・・・ですが。
　私たちはその前日に、事件の記念碑をみていました。以前日本人が神社を建てていたところを壊して、霧社事件の記念碑を立てそのあたりをそのための記念公園にしているのです。公園には「霧社原住民抗日群像」の銅像と指導者の銅像が立てられ、記念碑は、民国42年(1953)、63年、86年と三種あり、それぞれの時期によって蜂起の意義付けが違うように思えます。碑文の写真が読みにくいのでその検討はまだですが、蜂起の指導者・莫那魯道を「抗日英雄」86年、「抗日烈士」63年というのは今でも使われているようです。とともに、最近では、この
ように蜂起した際に、蜂起を自制するように指導した指導者も「英雄」とみなすべきではないかという意見が出されているということです。原住民間の部族対立が日本に利用されるなど、複雑な関係があるようで、とても興味深いことですが、あまり詳しいことは聞けませんでした。
86年の碑文には、「中日甲午戦後、日本據台、在霧社地区掠奪山地資源、展開武力威圧、泰雅族人死傷不計其数、復遭日人凌虐、致使族人痛心疾首、屡思報復」と書き出されています。一方では日本人賛歌を聞き、他方では日清戦争後から続いた日本の「略奪」「威圧」への恨
みを聞きながら、私たちは歩くことになったわけです。ただ、ここでは「原住民」（と言われてい
ます）と「漢民族」とが今でも、かならずしもうまくいっていない、平等でない、その間に差別があ
るという印象はぬぐえませんでした。霧社の近くに日本人が開いたという温泉町があります。私
たちはそこに泊まったのですが、温泉の効用はたしかのように感じられました。体の芯まで温

められるのです。それが長続きするのです。そのためかお客さんが多いのです。私ははじめ霧社村にも人がたくさん歩いているので、この事件の英雄を偲んでの観光客かと思っていたのですが、実は観光や温泉のためであって、霧社事件は有名だけど、原住民のみの問題とされることによって、人々をひきつける魅力にはなっていないのかもしれないと思い直しました。原住民の78歳Bさんとの聞き取りも、事件のことには及びませんでした。アート活動(山地民の伝統的な楽器の演奏や絵画など)をやっていてかなり有名な方だそうですが、村の入り口にお土産屋の店を開いていて、それなりに安定した生活をしておられるようでした。原住民でも数少ない、成功者の一人なのだろうと思いました。それにしても、台湾文化として日本人がすぐ思うのは、食べ物を別とすれば、漢民族の作ったものであるよりは、原住民の芸術の印象のほうが強いのは考えさせられます。ベトナムにも少数民族問題があり、過保護だとか、差別されているとか、人によって強調点がことなりますが、ベトナム文化という時には、もちろん少数民族の芸術もクローズアップされますが、それが本流になることはありません。私はほかの原住民の様子を聞き取りしたかったのですが、それはかないませんでした。しかしそのとき、昨年夏、北海道で偶然出会った貧しいアイヌ娘から聞いた話が思い出されて、・・・その娘は母子3人の家族で、母がプライドで生活保護を拒否しているために、その日の食事もママならない状況にあるという話を聴かされたのです。仕事がなくて老人介護施設の手伝いとして勤めていたが月2万円の給料しかもらえない、食事はその職場で支給されていたのでしょうが、なんとも酷い話で、憤慨したことを思い出します。つまり、Bさんの背後にはあのアイヌ娘が沢山いるのでないかと思うのです。

先生がおっしゃる、この事件で毒ガスが使われたことが当時の日本で報道されず、数ヵ月後にお知りになったということは、私には初耳で、とても興味深い問題ですね。ベトナム戦争においてナパーム弾や枯葉剤の使用やその酷さについて報道されたのは、すぐではなく、いくつかの網をくぐって、そしてやむなく公にされるという順序ではなかったでしょうか。私には岡村昭彦の写真集と開高健のベトナム戦記がその実情を伝えてくれた最初のような記憶がありますが・・・。台湾の山地民を対象にした毒ガス使用は、その後の中国大陸戦争で使われる生化学兵器の実験のひとつであったといわれます。アメリカが広島・長崎を選んだように・・・。その社会が他国の痛みをどれだけ感得・理解する能力を持っているかは重要でありますが、むつかしい問題です。そういう民衆の能力をおそれるからこそ報道管制になるのでしょうが、最近の日本の新聞はそういう能力自体を失っているように思えてなりません。報道統制など必要がないほどにジャーナリズムが鈍感になっているのでしょうか。もし、台湾での毒ガス使用の詳細が当

時
国民に詳しく知られていたら、それに対する抑止力が生まれてその後の生化学兵器の使用は見られなかったかもしれない。いや、当時の状況では抑止力を生む力は国民にはなかったということになるのでしょうか。戦争が人種主義によって彩られていることも考えなければならない
でしょう。

３、

酒井さんや勝俣さんとは、その時々に感想をもらしあったけれども、総括する時間なく別かれることになりました。酒井さんは講義のために新竹の交通大学に戻らねばならず、勝俣さんは明日の帰国のために台北へ、私は台南への一人旅と、別れ別れになったのです。その別れの宴で、東海大学の先生、30代の助教授で日本語教育にたずさわっておられる女性が、とても情熱的に周囲の無理解を批判していたのが印象的でした。日本の大学が「独立法人化政策」（民営化の一種――市場原理主義による運営）のために全体として崩壊状態にあるという話を持ち出す時間がありませんでしたが・・・。彼女は言語教育で本当にコミュニケーションでき
る能力を育てるためにはさまざまな異文化を体験させねばならないと、日本は言うまでもなく大陸や韓国やアメリカの調査旅行などを私たちは計画したのですが、お偉いさんたちは、日本語教育というと日本語学校のあり方を連想してか、そういうことに理解を示してくれないという
のです。彼女の言う事は斬新な発想で、たしかに日本語教育や日本文化教育は、日本のことだけ教えてもダメだと思わざるをえません。教室の中だけの教育は限界があるでしょう。
言語教育というのはむつかしいとつくづく思います。言語は決して中性的なものでなく、つねに政治的でないかと思います。話し相手やその文化、周囲の状況によって発話の効果が変化するものですから、挨拶の時にはこう、あやまる時にはこうと、それぞれのケイスのマニュアル
を教えても、それで充分とは決していえません。言語以前に、コミュニケーションをしようとす
る時には、相手がこちらに敵意を持っているか、好意を持っているか、無関心かを見定めねばなりません。また相手の文化を知っていなければなりませんが、その文化が問題です。教科書に書いてあるような何十年も前の日本文化は、今日では大きく修正しなければならないでしょう。80歳の人と、50歳の人と、20歳の人と、同じ日本人でも、大げさに言えば挨拶の仕方さえ違ってくるのです。しかも、日本文化を知るためには、日本だけ知っていても分かりようがありま
せん。台湾と比較しながら理解するのが初歩ではあるでしょうが、二つだけの文化を比較しても本当の比較にはならないことはすぐに分かることです。しかも二つだけの比較は、すぐにどち
らが優れているかということになってしまいます。文化の相対化は出来ないのです。また、アジ

アの国は近代以降、西洋の影響を大きく受けていますから、西洋の文化を理解しないと日本も韓国も分からないことになります。あらゆる文化は三者以上の関係の下にあるのだといえるのではないでしょうか。日本を理解するには、最低、アメリカと中国と朝鮮を知る必要があるでし
ょう。つまり言語教育は、言葉だけの教育だけでなく、文化教育が必要であり、世界的な歴史教
育が必要なのだと思います。彼女がそういう問題に何とか取り組もうとされていることに、その
情熱に、頭が下がりました。
その彼女が、総督府の日本語ガイドの話について、「ひょっとしたらガイドは本気でそう思っていたのかもしれない」とつぶやいたこと、別れ際だったのでそれ以上は聞けなかったのですが、“そのガイドさんは今でも霧社事件の原住民を同じ台湾人と思っていないのかもしれない”
と言いたかったのではでないでしょうか。一般の日本人が明治の時代に政府がアイヌの人たちを虐殺したり囲い込んだりしたことにほとんど無関心であったことや、今でも沖縄のことに対す
る関心がそんなに高くないことを考え合わせると、そのガイドさんを一方的に責められないような気がします。
また、酒井さんが台湾民衆の民俗信仰が昔のままに存続しながら近代化していることに興味を示していたことも印象的でした。庶民的な町中には、あちこちに仏教や儒教の祭礼場所があって、もちろん寺院もありますが、普通の町並みの一角に突然現われて、仏像や孔子像などの本尊が祭られて、たくさんの供え物が彩り鮮やかに供えられています。もともとの本尊より
も、隠れていた脇侍のほうに人気が集中しているようなところがあって、流行神的な性格を思わせます。あるところでは普通の民家の土間に巨大な孔子像を置いて、独特の信仰を説いていて、そこの家主さんが新興宗教をつくっている風なところもありました。ベトナムでも、仏教や
儒教の信仰が盛んで、新しい寺院や、寺院の改修、寺院でのさまざまなグッズの販売、地域での祭り、それらは最近になって盛んになってきたのでないかと思われます。大学の先生が地域の寺院に毎月参詣すると話すのを興味深く聞きました。檀家制があるわけでなく、宗派を問わず、気分によって寺を選ぶのだといいます。
ヨーロッパに旅した時に、教会に来る人は年取った女性のほかは観光客だけという印象を強く受けて、キリスト教信仰のうすれを思わせられたのですが、ベトナムの場合は社会主義国の崩壊後のソ連や東欧諸国で宗教が盛んになっていることに通じるのかもしれません。しかし台湾ではどうなのでしょうか。古い町には日本の地蔵堂に似た地神を祭る小堂が町角毎にあって面白かったのですが、そのほかも民俗信仰といってよいものが多くて、それは一定の教義や戒律・規範などに縛られた信仰というよりは利益神的な性格が強いのではないかと思いまし

た。宗教の問題はもっと調べないと印象批評は危険でしょう。

４、

私は高鉄(台湾の「新幹線」とも言われている)で台中駅から1時間たらずで台南駅に、さらに翌々日には30分くらいで高雄駅にと移りました。南下する新幹線の車窓からは、左側では3000メートル級の山脈の連なる美しい光景が遠望されて、ああこのなかに標高4000メートルの「新高山」（玉山）があるのだなと、国民学校時代に「日本一の高い山」として教えられたこと
を思い出していました。私たち日本人は山までも奪っていたのだと。手前には、左も右も、広大
な平野が広がり、日本の九州くらいの島国とはとても思えない広がりを感じました。いろいろな
ものが育てられて豊かな実りを思わせる風景でしたが、植民地時代はサトウキビ畑を強制されていたのでないかと、想像はつい植民地時代との比較になってしまいます。植民地支配による収奪とモノカルチャー政策とが、それまでの自給自足的なシステムを破壊していったことはたしかでしょう。その植民地時代以前は、ベトナムも同じだと思いますが、貧しくとも餓死すること
のない南国の社会があったのでないか、それを調べなくてはと思います。統計も見ずに、断片的な狭い知見だけで断ずるのは危険ですが、ベトナムも台湾も、「貧しいけれども豊かである」民衆社会というイメージが私の中につくられてしまったのです。ホームレスに滅多に会わないと
いうこともあります。私には1993年のニューヨークでホームレスの洪水に毎日接していた経験が強烈に残っています。また、そのほかにも旅行者には見えない問題がたくさんある事は否定できないでしょう。両国にも格差社会になりつつある問題がみられることはたしかです。にもか
かわらず、アメリカや日本のように貧乏人をだまして金儲けしようとする「貧困ビジネス」が堂々
とまかり通っているような状態はなくて、貧しくても餓死したり孤独死することはないという雰囲
気が、社会の雰囲気を和ませている感じがします。しかし、グローバリズムの潮流は台湾にもベ
トナムにも格差のますますの拡大、貧困のますますの拡大をもたらすのでないか、それが心配です。

台南市は、17世紀のオランダ人による占拠のあと、鄭成功による漢民族の支配が代って、それ以来の中国人の古い町並みが残る所、高雄市は日本の植民地支配によって日本人による
都市建設がなされたところという解説にしたがって、両者の比較を意識して観ようと思ったのですが、とても暑くて、35度から38度という気温なのです。これは現在の日本が異常気象といって経験しているのと同じ気温なのでまだ台湾から帰ったという実感が湧かないのですが、そういう暑さのもとではゆっくり歩くというわけにはとてもいきませんでした。それで台南では

ホテ
ルから自転車を借りて廻ろうとしたのですが、スコールに見舞われたり、道に迷ったりで散々で
した。広大な庶民の街が迷路のように入り組んでいるためで、おかげで庶民の町の活気とその親切さを体験できましたが・・・。
また、その折に妻のために台湾で出版されている絵本をお土産にと探したのですが、そう
いう絵本は普通の本屋になく、国立台湾文学館にいくと児童図書室があって、そこに親子がたくさん出入していて日本のように読み聞かせなどをやっていて、一部の階層、おそらくは中産階級の人たちには、その規模は小さい(つまり、中産階級の比率が日本より小さい)けれども、日本と同じような児童文学、絵本ブームが台湾にも見られると感じました。そこで紹介された誠品書店へも散々迷いながらたどり着きましたが、この本屋は日本の本屋に勝るとも劣らない充実したハイカラなセンスの本屋で、私の相談にも親切に対応してくれました（そこで推薦して
くれた絵本の半分は現地民の画家の本でした）。こういうことから振り返ってみると、庶民的な
町とは別に、東京やニューヨークにそっくりの喫茶店やレストラン、花屋さんが見られ、台湾中間
層文化は欧米や日本と一様な姿で広がっていると思わざるをえません。中間層文化はグローバリゼイションで世界一様になっているけれども、庶民文化は各地域で多様な個性というか、違いが大きいといえるのかどうか。ベトナムと比べると本屋といい喫茶店といい台湾のほうがずっと豊かで、つまり中間層文化の量は両者の間に随分の「落差」があり、おそらく台湾は中国
本土よりも中間層の近代化の密度は高いと思われましたが、様式は一様であるといってよいでしょう。
高雄市では日本支配の痕跡は中々見つけられませんでした。おそらく幅広い一直線の街路
などにその都市計画の痕跡があるのでしょうが、それ以外の痕跡はほとんどなくて、台湾の近代化の激しさを思います。歴史博物館に行きましたが、日本の植民地時代のところを見ていると若い男女二人の館員が寄ってきて盛んに話しかけてきます。言葉は半分も通じませんでしたが、いくつかの資料については私のほうが説明する始末でした。館員は最後には一緒に写真を撮ろうと言い出して、好意こそ感じても敵意は全くありません。私が植民地支配を批判的に説明したからでしょうか、日本はいまだ植民地支配や戦争の加害責任を果たしていないということを指摘したからでしょうか。

5、

私は太平洋岸の台東へ行くことにしました。高雄にいてもあまり成果が得られそうにないこと、台東では、原住民が集住させられたところで、人口の半数近くを占めているということでしたので、その方に関心が向いたからです。山脈を越えた太平洋側は、日本の日本海側と似て、全体として経済発展の遅れた地帯という感はぬぐえませんでした。もちろん近代化の波はひとしく及んでいて、ある小さなデパートの地下では日本人が経営する回転寿司屋が繁盛し

ているなど、結構賑やかな街なのですが、高層ビルが少ないとか、交通の便が悪いとか、などから感じるのです。私はよければ、あの明治初年に宮古島の漁民を虐殺したことが発端となって、日本軍が近代になって最初の海外派兵を起こした牡丹村に行こうと思ったのですが、交通の便が悪いのでレンタカーを使えない私には無理だと分かり断念しました。戦後、牡丹村の人が沖縄を訪れてそのときのことを謝罪し、和解し、いまでは宮古島の人と牡丹村の人とは互いに交流するようになっていると聞いて、ほっとした思いにさせられました。それにしても、その
時の日本軍と原住民との激烈な戦争は、岸田吟香の従軍報道(おそらく日本における従軍報道の最初)によれば、ベトナム戦争を思わせるようなジャングル戦で、日本軍はアメリカ軍のよう
にたいそう苦戦したようです。
せめて台東市の近くの原住民の村を訪ねたいという思いも、時間と通訳、ガイドの問題で断念しました。しかし、街中を歩いてみて、原住民の人たちが清掃業関係の労働に従事している姿を見て、日本の被差別民、欧米における黒人、アラブ人の姿と重ね合わさざるをえませんでした。それは外国人労働者ではないかという意見もありましたが、私には区別することができません。私には識別できなかったのですが、外国人労働者が多数入ってきているということで、韓国でも中国人や東南アジアの人々がたくさん入ってきて、韓国社会との摩擦を起こしているとか、そういう外国人労働者に対する蔑視観が広がっているとの話を聞いて、韓国も小帝国となっているという感を深くしたのは10年前でしたが、台湾もそのあとを追っているのでしょ
うか。
1980年に私が初めてあこがれの自由・平等・博愛のパリを訪れた時のその鮮烈なイメージは今も残っています。私が国立図書館の前で生まれて初めて黒人青年と、中央郵便局の中ではベトナム青年と話をしたことも印象的でしたが、早朝に散歩に出たとき、アラブ人たちが灰皿のようにタバコの吸殻だらけになったパリの街路をホースで排水溝に流し込んでいる姿、退勤時に病院からどっとかたまって出てくる黒人看護婦さんの群、ソルボンヌ大学近くのカフェで
私の席から10メートルもはなれていないテーブルに着こうとした数人の中国人青年達が、ボーイにはげしく怒鳴られて追い払われている光景などが今も鮮明に残っています。
38度の炎天下で一時間も歩くのは初体験でないかと考えながら、あまりにも暑いのでたまらなくなって、しゃれたレストランに飛び込むと、誰も客が居なくて、店長が出てきて「営業時間
ではないのですが・・・」と、「ああそうでしたか、知らずに入ってすみません。コーヒーでも頂こう
と思ったのですが・・・」、「コーヒーくらいなら差し上げますよ」、「ああ、それは助かった。アイスコ
ーヒーをお願いします」・・・・・「どうもご馳走様でした、おいくらになりますか」、「いや結構です」、

「はぁ、どういうことです？」、「フリーです」、「？！」、「御代は頂きません。営業時間ではないか
らです」、「そういうわけには行きません。私は熱中症にならずにすみ、皆さんには御苦労かけたのですから」といったやり取りが、この暑い中での、さわやかな時間でした。もちろん、お金は
無理やり置いていきました。周りに好奇心に溢れた面持ちの数人のウエイトレスがいたこともあ
って・・・。
これとよく似た経験をハノイでもしました。パリの喫茶店に似た街路に広がるテーブルに坐って、2万ドン（ほぼ150円）のココアを頼んで夕暮れの街の雰囲気を楽しんだのですが、いざ席を立とうとして財布にはベトナム紙幣で1万5千ドンしかないことに気付きました。米ドルは持
っていましたし、タクシーではいつも米ドルで済ましていたので、ボーイさんに、「1万5千ドンし
か持っていないのだが、1ドル（8千ドンくらい）あるからこれで不足分を埋めてくれないか」と頼
みました。ところがボーイさんはニコニコしながら、「それじゃ1万5千ドンだけでいいですよ」と
いって、ドル札を受け取ろうとしませんし、私に怒った顔を見せることもありませんでした。その
とき、こんなことは日本では考えられないと思ったことでした。ベトナムも市場原理が支配的で
す。社会主義国とはとてもいえません。台湾は一層そうであると思います。にもかかわらず市場原理主義（金儲け万能主義）を無視することを抵抗なくやっている姿がここにあるのでないかという驚きのような感慨を覚えたのです。もっとも日本でも下町では、庶民的な店では、そう
いうことも起こりうるかも知れないと思います。しかし、ベトナムも台湾もともにハイカラな店での
事件だったのです。近代化された店だったのです。
そして、こんな小さな経験の断片が印象深いのは、その他のいろんな場面でこれに通ずる
事柄や雰囲気がいくらでもあるからです。日本でもあるだろうけれども、その度合いというか密
度が全く違うのです。庶民的な飲食店や雑貨屋は勿論、ホテルでの応対や本屋さんで本を探してくれる店員の態度、図書館での司書の態度などもそうです。ハノイは道路がいつもバイクの
洪水で、私のように慣れないものにとっては横断歩道があっても道を横切るのが大変なのですが、小学六年くらいの少女がやってきて「一緒にわたってあげようか」と手を差し出してくれ、私が「大丈夫だよ、一人でわたるから」といって向こう側に渡って振りむくと、彼女はじっと

見守ってくれていて、手をふってくれたのには感激でしたし、また別のところではバイクに乗った20歳くらいの女性が私のほうに手を上げて、今のうちに早くここを横切りなさいというしぐさをするのです。私が一寸危険だなとたじろいでいるうちに信号が変わり、彼女は「頑張ってね」と手を振って走り去りました。こういうことが何度か続くと、私はベトナム女性にもてているのでないかと思い込みそうになります。台湾の女性たちも優しさにおいて変わりがないというのが私の実感です。しかしベトナムも台湾も儒教の伝統があるから、老人を大事にする敬老の精神が行き渡っていると考えたほうが妥当であると思い直したことです。あとで学校の先生に聞くと、学校でも親や年長者を敬えという教育が行われているということでした。中国大陸や韓国も儒教の国で、師弟関係や親子や親戚の関係は緊密なものがあり、先生の前では煙草を吸わないとか、食事の時は先生より先に箸をつけないとか、しばしば驚かされたものですが、やや形式的な感じがしました。しかしベトナムや台湾ではそれが自然で温かみがあるように思えます。しかし、それが儒教的な精神に通じるのであれば気がかりがないわけではありません。そうした礼儀は家父長的なイデオロギーが求めるものでもあるからです。そして社会主義国で一番克服が困難だったのが、無謬神話や官僚主義とともに家父長的イデオロギーであったということを思い出さざるをえないからです。その辺の事情を知りたいものです。
あるいはまた、そういう親切ややさしさは私を日本人と認めたためであろうか、日本人だからそうしたのであろうか、外国人だからそのように親切にしたのであろうか、とも考えてみました。実際、台北では喫茶店に入っていくと「あなたは日本人でしょう」ととてもうれしそうに迎えてくれることがよくあったのです。私は特に目立った服装をしていたわけでないのになぜ分かるのだろうと不思議に思いましたが、日本でも外国人に対してそういう親切や寛大さを示すことがありうるけれども、日本人よりもとても自然な感じがしたのでした。同じ島国でも、日本よりも、外国人に対してずっと開放的だと痛感しました。

いずれにせよ市場原理主義の裂け目のようなところがいっぱいあるという感じが両国に共通するように思われます。この「裂け目」にこそ、わたしたちが学ばなければならない問題が埋まっているのでないかと思います。しかし、こういうような現象を、歴史の発展段階に位置づけますと「おくれた現象」となり、ベトナムも中国も社会主義国とはいえ、実際は修正資本主義のようなものですから、日本と比べてもいいと思いますが、ベトナムは日本のまだ家族のつながりがしっかりしていた1960年前後、台湾はもう少し経済の高度成長が進んで社会的な潤いとともに公害などの弊害が顕著になり始めた1970年頃、そして中国本土や韓国はバブル期の80－90年代にあると、整理することもできるでしょうし、それで説明しやすいことは結構あるのですが、そのために進んだ国と遅れた国という色分けで歴史を処理したり人間を評価したりすることになってしまいます。日本人の多くが今なおアジア諸国を上からの目線で見ている（そういう現象はいくらでもあげることができます）、優越感で見ているその原因のひとつがそういう進化論的歴史観あるいは進歩史観にあるといえるのではないでしょうか。

６、

私自身もそれでやってきたわけで、それを本心から反省するようになった？のは外国へ行くようになったためのような気がします。ヨーロッパ近代の神話を壊した70年代の阿部謹也さんの諸作品、次いでの進歩史観批判ののろしをあげた網野善彦さんの仕事、さらにフーコー

やアンダーソン等々と次々に新しい研究が出て、80年代のサイードのオリエンタリズム批判は衝撃的でしたが（私は93－94年にコロンビア大学にいてサイードに会っていなかったのが残念です。私が『オリエンタリズム』を読んだのはその帰国後でした）、それらの激しい刺激と格闘し
てあたまのなかではいろいろと考えてはいましたが、実際に欧米の地に出かけたのは80年代で、それは断片的な経験でしかありませんでしたが、理論で考えていた歴史にリアリティーを、
というよりも現在生きている人間のあり方を考え直させることになりました。発展段階で社会の
あり方を位置づけるというやり方も、そのことがアジア人や白人の人間の値打ちを決めるものでないことは、実際にその人たちと話をすればすぐ分かることですし、社会の仕組みの順序のつけ方も、はかるモノサシで随分違ってくることがすぐに分かります。外国人がどれほど住みや
すいか、あるいは自殺率、老人独居率、いじめ率、等々、人間が不幸になる度合いがどうかで文明度をはかれば、アメリカや日本が一等国であるはずがありません。民主主義の制度が西洋的には整っていても、人間関係が希薄な社会で民主主義はありうるのかという問題がありましょう。網野さんのように簡単に？反近代を唱えるわけにいきませんが、発展段階論はやはり、
大幅に組み替えられるべきで、あるいはそういう序列化による優劣の視線を超えた歴史の見方を作り出す必要があるように痛感しました。今のベトナムが20年、台湾が10年、日本より経済
的に遅れているとして、日本の発達度よりもよりスピードが速まって数年後には現在の日本のよ
うになる、とすれば、自殺が、独居老人が、いじめが、貧困家庭が、日本と同じように増えるとす
れば、それは絶望的というしかありません。歴史が信じられなくなるでしょう。
私は80年代から堰を切ったように海外への旅にとり憑かれたのですが、アジアへの旅はそれからずっと遅れました。遅れたのは、私自身のオリエンタリズムのせいかもしれませんし、十五
年戦争における日本人の戦争責任の問題を充分に整理できないままには行けないという思いもあったからです。にもかかわらず中国、韓国へ行き始めたきっかけは学生の強い要望に押されてのことで、このたびのベトナム、台湾と東南アジアへの初めての旅は友人に招かれたからですが、それは、つまりアジアへの旅はいつもそのための準備が不十分なままであったことを示しています。そして、台湾を訪ねて、戦争責任のことが、戦争責任だけの問題として完結するものではなく、あらためて多様な側面から深められねばならない現在につながる問題であることに気付かされます。歴史学は地球全体を視野に入れつつ、現在生きている人間への愛と希望と想像力がなくては、そしてそのための自己変革の覚悟がなくては、とてもやっていけな

いということを、あらためて痛感させられた次第です。
牛のよだれのようにたらたらと、とりとめもなく書き連ねてしまいました。今回が最後の海外旅行になるという思いで、つい、気付いたことをなんでも書いておこうという気分になってしま
って、このなかには誤解や間違いも多いことと思います。ちゃんとした整理もしない文章になっ
て、退屈な話を重ねてしまいました。お許しください。
まだ異常気象による酷暑は続きそうですが、どうかくれぐれもお体に気をつけられますように。　　敬具
2010 年 8 月 10 日